今年も当塾が解説

千葉日報

2021年度公立高校選抜試験　出題傾向

２０２１年（令和３年）２月２５日（木曜日）

読み取りと記述力必要

国　語

昨年度前期と比べると、大問が一つ減った。

大問1は聞き取りテスト。昨年度は1題あった記述がなくなりすべて記号になると同時に配点が2点減り8点になった。

大問2、3は漢字の読み書きでこれは問題数、配点とも昨年度前期と同じであった。

大問4が昨年度までは文法・漢文であったがこれがなくなり、漢文のみ大問6に移動した。このため、以後の大問は一つずつずれることになった。このため大問4は説明的文章の読解である。配点が3点増え23点に。(5)の記述が書き抜けではなく、本文の内容を理解した上で40字以内で書く問題になった。少し長い記述問題なので、読み取りや記述の力が求められた。小問数は同じである。

大問5は文学的文章の読解である。これも配点は1点増えて21点に。記号・記述の問題バランスや小問数は昨年度までと同じである。

大問6が古典。小問は記述が減って記号問題が増えた。

大問7は例年通りの２００字作文である。データの読み取りと自分の考えを書かせるものだ。

全体としては問題数がやや減ったものの、読解問題での記述が長いため、解答時間との兼ね合いもあり、平均点は昨年度並みではないか。

（岩瀬　隆平）

平面図形かなり難しく

数　学

問題構成は大問が5題で、昨年度前期と同様であり、各小問の配点も同じである。

大問1は計算問題6題。いずれも基本的である。

大問2は小問集合5題。(1)資料の活用(2)数量関係の立式(3)円柱の表面積はいずれも平易である。(4)確率は難しそうに見えるが落ち着いて計算すれば正答できる。(5)作図は「2点からの等しい距離」など図形の知識が必要だが、昨年度前期より簡単である。

大問3は二次関数。(1)と(2)①は平易である。(2)①は定期テストで類題を解いたことがある受験生も多かったのではないか。(2)②は図形の面積を変えずに変形した上で座標を文字式で表す必要があるので大変難しい。

大問4は平面図形。(1)の証明は空欄補充、記述ともに易しい。(2)は辺の長さを求める問題だが、作業数が多く、かなり難しいため正答率は低そうだ。

大問5は規則性の問題。(2)は記述式で、思考力・表現力を求めるものであったが、定期テストで出題されるレベルのため比較的点を取りやすい。ただし条件設定が分かりにくく規則性を捉えられない受験生も多かったと思われる。

大問2の易化の影響で平均点は昨年度前期よりやや上がりそうである。

（小高　友宏）

メールやりとり題材に

英　語

試験時間が50分から60分に伸びた。全体の大問構成は前年度前期とほとんど変わっていない。

大問1から大問4はリスニングテストで、問題構成や問題文の長さ、配点など、昨年度前期と同じであった。

大問5の文法問題も、昨年度前期と同じ形式で配点も同じである。

大問6の英作文は昨年度までの一つの絵を見て答えさせるものから、四コマ漫画の最後のセリフを書かせる、より表現力を問う問題となった。絵の中の人物の立場に立って思考・判断する必要があり、やや難しい。

大問7は8行程度の長文読解で、小問(2)が英作文から単語を書かせる問題に変更になり、配点が1点増えた。

大問8は電子メールのやりとりを題材にした英文読解問題である。小問(2)が単語を書かせる問題から英文で答えさせる形式に変更になった。小問数や配点は昨年度前期と同様である。

大問9は対話文の読解問題で、(4)に表現力を問う問題が入った。配点が1点増えた。

全体的に英文の量が増えたり、難解なものになったわけではないが、文章中の情報を的確に理解し、それを思考・判断する必要があり、平均点は昨年度前期並みではないか。

（金坂　嘉一）

２０２１年（令和３年）２月２６日（金曜日）

4分野がバランスよく

理　科

例年通り、物理、化学、生物、地学の4分野からバランスよく出題されている。また、履修学年も各学年から出題されている。大問9題構成であることや配点は前年度前期と同じである。

大問1は小問集合。記述が1問から2問に増えた。

大問2は火成岩と地層。(4)の柱状図による地層の傾きの問題はやや難しい。

大問3は真空放電とフレミング左手の法則について。実線回路図に書き込ませる問題は２０１６年度以来の出題だ。

大問4は蒸散についての平易な問題。

大問5は再結晶とろ過に関する問題だが、(4)②はやや長い記述問題で、受験生は戸惑ったかもしれない。

大問6は天気の変化について、これも平易だ。

大問7は銅の酸化について。(3)のグラフ問題は、ここ数年よく出題されている。化学反応式を書かせる問題は17年度以来だが難しくはなかった。

大問8は生態系についてで、すべて記号で易しい。

大問9は仕事・力。(3)の作図は近年、毎年出題されている。

全体に平易で取り組みやすい問題が中心であった。昨年度前期と比べると易し目で、平均点もかなり上がるのではないか。

（金坂　嘉一）

基礎・基本的問題中心

社　会

昨年度前期と比べると、大問が1つ減って、7題構成になった。例年大問8で出題されていた「国際社会」からの出題がなくなったためである。新型コロナによる学校休校に配慮したものであった。

年代整序問題が2題、記述問題が地理、歴史、公民から1題ずつという構成は変わらない。

資料の読み取り問題も例年通りに出題されている。

大問1は総合問題で、小問数、形式、配点は昨年度と同じ。

大問2は日本地理で配点が1点減った。大問3は世界地理で逆に配点が1点増えた。地理全体では配点は同じである。

大問4は前近代史、大問5は近・現代史であり、平易な問題であった。

大問6は経済、大問7は政治と公民の問題で、国際社会の6点はこちらに振り分けられた。

大問1の年代整序は１９２５年から47年までのもの。国会が成立しなければ憲法も審議できないという常識があれば簡単だったろう。一方、大問5は１９５５年から97年までのものだった。戦後の歴史を確実に記憶していないと難しかったかもしれない。

全体としては基礎的・基本的な問題がほとんどである。直接請求の計算も平易である。このため平均点も昨年度前期と同程度ではないか。

（岩瀬　隆平）

【執筆】

理科・英語＝金坂嘉一　塾長

社会・国語＝岩瀬隆平　講師

数学＝小高友宏　小高進学塾塾長